

『のら』が振り返ると、そこには一人の女の子が立っていた。「お退きなさい。見えな
いでしょ。』のら』を突き飛ばし売り場の前に立ち、「ここが一番高いのはどれ、早く私
に見せなさい」と言った。若い店員は驚いていたが、後ろにいた少し偉そうな店員が、「姫
様いらっしやいます。すみません。若いのは礼儀を知らなくて」と言っ、女の子の相手
を始めた。『のら』はキョトンとしていたがやがて立ち上がり、隣のガラスケースにまた
顔をくっ付けた。

また若い店員が、「指輪をお探ですか」と尋ねると、『のら』は「家にはもっと綺麗な
のがあるの。』のら』の宝物なの」と言い返した。それを聞いていた姫が、ピクリと反応
し、「」なんですって。聞き捨てならない子ね。見せなさい」と言っ、『のら』は「ベンジ
ヤミンのお家にあるの、遊びにきたら見せて上げる」と答えた。「ふん。どうせ見栄ね
」と言っ、姫は『のら』をどかし、「ここが一番高い指輪を頂戴」と言った。

『のら』は次に服売り場に来ていた。そこへまた姫が現れた。「あんな汚い服ね」と言
っ、自分の服を見せびらかした。「この服はブランドものよ。このマークが目に入らな
いの」と言っ、小さなマークを見せた。すると『のら』はじっと見ていたが、やがて「ブ
ランド、ブランド」と言っ、自分の服の真ん中を指差した。それを見た姫は、「それは
ただの汚い』の』の字じゃない。ブランドとはじつじつ」と言っ、『のら』の目の前
に自分の服を近づけた。『のら』はそのマークに手を伸ばし、「同じ、同じ」と触っ、喜ん
でいる。』のら』が手を離れたマークの部分には、汚い手跡がくっきりと付いていた。

